ケアセンターけやき（通所リハビリ）

症　例　概　要　利用者　90歳代・女性・要介護3

利用期間　令和4年8月～現在

既往歴　左大腿骨頸部骨折術後

経　過

ご本人は特定施設に入所されており、令和7年4月初旬に転倒され左大腿部に疼痛を認めていました。翌日に竹川病院整形外科受診し左大腿骨頚部骨折と診断。その後に他病院へ入院し人工骨頭置換術を施行。入院中不穏状態が続き、積極的なリハビリの介入は困難な状況でした。ご本人の慣れ親しんだ施設で精神的に安定して過ごせる様に5月初旬に早期退院され、低下した身体機能やADL能力の向上を目的に、ご家族希望で週5日のリハビリ開始となりました。

内　容

受傷前は週1回のリハビリを実施し、歩行器で屋外を約250m回るなどADL能力は比較的保たれていました。しかし今回の骨折により身体機能がかなり低下し、退院直後には施設のフロアを10m程歩くだけで疲労感の訴えがあり、また術創部に疼痛を認め、体を動かすことへの恐怖心や拒否感が強くリハビリが思う様に進まないことがありました。さらに認知機能面の低下によりスタッフに対し易怒的であり、ご自身の中で納得できない事があるとつねったり歩行器で突進しぶつかってくる等スタッフに対して暴力的になることがありました。それによりご本人とも上手く関係を築くのが非常に困難な状態でした。ご家族も身体機能が低下してしまった事にかなりショックを受けてしまっているご様子で「今回、骨折をしてしまったからもう歩くのは無理かしら」と悲観的な発言を認めていました。

そこでまずは、ご本人と信頼関係を築くという事を目標にリハビリを実施しました。開始当初は、「リハビリ」という言葉を出すと攻撃的になる様子があった為、リハビリスタッフであることはあえて隠して、ご本人の話を傾聴しコミュニケーションを密に取るようにしました。入居スタッフとも随時ご本人のご様子を共有して不穏にならないような対応を心がけました。そのような対応を継続することで少しずつリハビリスタッフとして認識がされる様になり、段々と易怒的な様子もなくなっていきました。最終的にはリハビリに伺うと笑顔で手を振って下さるようになり、信頼関係を築く事が出来ました。

ご本人の不信感や不安感が減少したためリハビリに対する拒否も減少していき、筋力練習や歩行練習などを積極的に実施出来る様になりました。少しずつ身体機能の向上を認め、今では屋外を50m程歩行出来るまで回復しています。普段笑っている様子が少ない方ですが、初めて屋外歩行をしたときは「気持ちいいね。また外を散歩したいわね。」とキラキラした笑顔で意欲的な発言を聞くことが出来る様

になりました。ご家族ともリハビリの進捗状況等を積極的に共有をしており、最近のご本人のご様子を受けて、「もう前みたいには歩けないのかしらと諦めていたので、外を歩けていると知って安心しました。」と大変喜ばれており、ご本人の前向きな変化に共に喜びを感じております。

認知機能面低下により積極的なリハビリ介入が困難であった事例ですが、ご本人の精神的安定を図れたことにより、歩行能力の再獲得が出来、キラキラとした姿で生活を送ることが出来る様になったことから、この事例をキラキラ介護賞に推薦したいと思います。

【OUR TEAM】

○娘さん（キーパーソン）：安心感の提供・通所継続の精神的支柱○ケアマネジャー（CM）：ご本人の不安に配慮した支援計画の立案、娘さんの同行支援の調整、多職種連携の推進○介護職員：安心できる活動環境の提供・同行支援・入浴サポート・日常の見守り○看護師：体調管理・精神的安定への寄り添い・医療的観察○セラピスト（PT）：週5回・1回20分間の個別運動プログラム実施・活動意欲の引き出し○職員全体：交流の場の提供・社会参加促進・安心できる雰囲気づくり